

特集 企業内診断士のネクストキャリア

第5章

【コンサルタントとして独立】

学生時代からの夢に向かって

青木 一生さん



島津 浩平

東京都中小企業診断士協会城北支部

「日本の中小企業を支援したい」というのは、中小企業診断士の資格を取得する方の共通の思いではないだろうか。

学生時代から中小企業支援に関心のあった青木一生さん。キヤノン株式会社に在職中に診断士資格を取得し、自分のやりたいことに集中するため、29歳で独立。

学生時代からの夢に挑戦している青木さんに、現在の仕事の内容や仕事への思いなどを伺った。



【青木さんの略歴】

2013年：キヤノン株式会社入社。社内トレーニー制度により、大分キヤノン株式会社へ出向

2014年：中小企業診断士試験合格

2016年：中小企業診断士登録

2017年：アライフコンサルティング開業

1. 経営コンサルタントへの思い

青木さんは、さかのぼること中学生時代、公民の授業を通じて企業経営に興味を持った。その思いを持ったまま、大学生時代は経営工学と金融工学を専攻。その後、経営コンサルティングに憧れを持つようになり、今の知識を体系的に生かすための最適な資格を探していたところ、中小企業診断士に出会ったという。

経営コンサルタントとして、なぜ中小企業支援を行いたいと思ったのか。

「もちろん、素晴らしい製品を作っている大企業は圧倒的存在です。その中で、製品を構成する1つひとつの部品は、中小企業がそれぞれそ命を懸けて作っています。その熱い思いを感じて、自然と中小企業やその社員の方々に支援したいと思っていました」

学生時代、診断士資格の勉強をしながら就職活動を始めた。就職活動中、経営コンサルタントとしての自分なりの強みを求めて、診断士資格の勉強を通じて知り合った多くの先輩診断士に話を聞いた。理系である青木さんにとって、キヤノンの持つ改善ノウハウを学ぶことは強みにつながるのではないかと結論を出し、入社した。

半年間の実習期間を終え、AIを利用した生産技術の開発をはじめとした最先端の改善を行っている大分キヤノン（生産子会社）へ、

社内トレーニー制度により出向。調達、生産管理および経理というキヤノンが考える工場を運営していくうえで要となる3つの業務をこの期間に経験した。大分キヤノンにいる間の2014年に診断士2次試験に合格。3年間の業務を終えて本社に帰任することになる。

本社に帰任した後は、生産技術戦略部で生産装置の効率化やコストダウンなどの企画に従事した。

「仕事は大変楽しくて、本当に何の不満もなかったです」

大分は実務補習が行われる福岡と地理的に遠く、参加が難しかったため、東京本社に帰任後の2016年9月1日に中小企業診断士登録。キヤノンでは副業が認められており、自社業務に従事するかたわら、平日の夜や土曜・日曜は、先輩診断士などから仕事を紹介してもらい、中小企業支援を行う機会が多くなった。

独立の契機となったのは、あるコンサルティング会社の社長から依頼を受けた経営革新計画策定の支援だった。経営革新計画は企業の現状を把握したうえで、新規事業を立案し、それを具体的な数値計画に落とし込む。まさに中小企業診断士を象徴するような業務である。そして、策定支援を行う過程で、青木さんは「やっぱりこれだ!」と、全身に稲妻が走るような衝撃を受けたという。

「私がやりたいのはやはり中小企業支援だ。本当にやりたいのはこれなのに、今の自分は何をやっているのだろうと感じました」

この直後に行われた上期の評価面談の席において、気がつけば上司に対して退職の意思を表明していたという。

2. 準備ゼロからの独立

(1) 事前準備ゼロで退社

退職の意思表明を行ったときには、独立の準備は何もしていなかった。上司からは心配されたが、不安はまったくなかったという。

「一度きりの人生、自分のしたいことをするために生きていると思っているから、そも

そも『不安』という概念がなかったです」

退社の際に周囲から、「辞めて何をするのか」と聞かれ、詳細を語らず「中小企業支援を行っていきます」とだけ伝えた。しかし、逆に「中小企業診断士か?」と聞き返され、中小企業診断士の存在が周知されつつあるのを知ると同時に、資格の強さを感じたという。

(2) 診断士資格がつけが仕事

キヤノンを退社後、具体的にどのように中小企業を支援していこうかとインターネットで検索をしながら考えていた際、「よろず支援拠点」および「中小企業基盤整備機構」の公募に出会い、すぐに申し込む決意をした。

面接では、中小企業支援に対する思いを熱く語り、キヤノンで培った改善業務に関する知識やノウハウを役立てると伝え、採用された。採用された理由は、診断士資格を持っているからではないかと青木さんは話す。

「診断士資格を持っていることで、中小企業支援に対して基礎知識が担保されている点は、評価してもらえたのではと思います」

よろず支援拠点では文字どおり、売上拡大・事業承継・創業・廃業等々、事業者に関する悩みであれば何でも相談を受ける。さまざまな中小企業と接点を持ち、その深い悩みを知ることができる。同時に経営相談を通じて自分の知識も著しく増加していくことを実感できるという。多種多様な相談を受ける際、診断士資格が知識面で生きていると話す。

「よろず支援拠点に限らず、中小企業診断士はどのような悩みでも一度受け止め、必要に応じてほかの専門家と連携して解決を図る町医者的な役割が求められていると思います。診断士1次試験で7科目、2次試験で4科目、口述試験そして実務補習という形で、経営を幅広く知ることができたため、ヒト・モノ・カネ・情報のすべてについて得た知識は相談者と話をするうえで確実に生きています」

一方、中小企業基盤整備機構では、大手企業と中小企業のビジネスマッチングを推進するコーディネーターとして、1つの企業の技

術ニーズを深く分析する仕事に就いている。2つの公的支援機関での業務はどちらも今後の成長につながるという。

これらに加えて、現在は開業した「アライフコンサルティング」でコンサルティング案件の受注も行っている。

(3) 独立後の自分

退社する前にはまったく準備をしていなかったものの、2つの公的支援機関やアライフコンサルティングとして仕事を受注している青木さん。なぜ自分が仕事を受注できているか、青木さん自身の分析を聞いてみた。

「コンサルタントとして31歳はまだまだ若造です。実際に知識面では長年の経験を持つベテランの方にはかなわないと思うことが多々あります。だからこそ、打ち出していったのは、熱意や意気込みです。こうした熱意や意気込みをベテランの方が買ってくれて、『じゃあ、青木に任せてみようか。一緒に仕事してみよう』と思ってくださるのかなと思います。本当に感謝しています」

どの職業でも、一般的に長年の経験がある方が有利だ。特にその業界経験の長い社長が相手の中小企業診断士は最たる例であろう。その中で、いかに独自性を高め、アピールするかについて、改めて考えさせられた。

ネクストキャリアとして独立を考える企業内診断士は、独立後の金銭面に不安を抱く方が多いと思う。青木さんの現状を聞いた。

「結果としては、現在は前職よりも多い収入をもらっています。ただ、仕事がなくなれば大きく下がるのは間違いないですから、来年はどうなるかわかりません」

今後の不安については、特にないという。

「今は中小企業支援をできているだけで幸せです。金銭面はその次ですね」

ここまで聞くと、順風満帆のように感じられるが、実際は毎日が苦労の連続だという。

「自分が100点と思うときはないです。相談者の社長や先輩診断士は豊富な知識を持っていますから、学ぶことは毎日あります。だか

ら、たとえ上手くいかなかったとしても、ネガティブにならず、むしろ『こんな世界があったのか』と興味津々になります」

その毎日の勉強が次の仕事の中で生きることも多く、自分の中に確実に落とし込んだ知識をほかの現場にて別の形で伝えることもあると話す。コンサルティングの中で積み重ねられる知識をしっかりと吸収して次に生かしていくことを、青木さんは着実に実践しているように感じた。

(4) 他士業との協働

企業支援にあたっては中小企業診断士だけではなく、弁護士や弁理士などをはじめとしたさまざまな他士業と協力してチームで行うことも多い。そんなときに、診断士資格が生きてくることがあるという。

「地元が一緒だとすぐに仲良くなることがあるのと同様に、実は他士業の方でも診断士資格を持っていることが多く、共通の話題ができることで、お互いの距離がグッと近づくことがあります」

また、チームで働く人が診断士資格を持っていなくても、中小企業診断士のネットワークは広いため、互いに面識のある人の名が出ることも多く、親近感がわくという。

チームを組むうえではもちろん、士業同士の連携が求められる。青木さんの話を聞くと、診断士資格は、その際のある種の結束点になっているのではないかと感じられた。

3. 今後について

まだ31歳の青木さん。今後のキャリアは、仮に60歳までだとしてもあと約30年。その後も働くことを念頭に、キャリアでなし遂げていきたいことや今後の夢について伺った。

「僕の最終目標は、日本の中小企業が事業を行う中で、ひざとため息をつかない世界にすることです」

最終目標を達成するうえで、青木さんがやりたいことは、時代に合った中小企業支援が

できる組織を作ることだという。

「今から10年前に『スマートフォンやSNSが普及して、誰もが自分のメディアを持つ』時代が来ることを想像できた人はほとんどいないと思います。今から10年後にどのような世界になるのかはわからないため、情勢の予測が困難な中でも、自分の絶対的な強みを生かしつつ、時代に適した柔軟な中小企業支援を行っていきたいです」

たしかに、技術革新をはじめとして劇的に変化する世界情勢の中で、何年後かの自分を考えるのは難しい。その状況で次のように話す。

「最終目標として、僕がこの世を去った後も中小企業支援が継続できる組織を作りたい。そして100年後、200年後、それこそ300年後もその時代に合った支援を行ってほしい。たとえば、300年後に存在するある企業が『青木という人が300年前に創業した組織にうちの会社は助けられた』と思ってくれるような未来になればと思います」

一人のコンサルタントとしての枠を超えて、将来にわたって中小企業支援を行っていく、という思いを十分に感じる事ができた。

4. 企業内診断士へのメッセージ

最後に、日本の中小企業を支援したいという共通の思いを持つ企業内診断士へのメッセージを伺った。

「皆さんがやりたい形の中小企業支援をやっていただきたいということですね。現職の企業でやりたい支援ができれば残るのもありますし、現職の企業ではできないことならば、独立するのもあります。私は自身に『やりたいことは何か』と常に問いかけながら生きてきました。キヤノン時代は考えようによっては多くの中小企業に影響がある仕事だったと思いますし、その中で間接的にできる中小企業支援はたくさんありました。ただ、自分が現場で個社支援を行ったときに、やはりやりたいことはこちらだと決めました」

青木さんを突き動かしている強い思いはどこから来ているのだろうか。

「誰に頼まれたわけでもない勝手な使命感は誰もが持っていると思うのです。私はその使命感を果たすということに真っすぐに取り組んでいるだけです」

29歳で大企業を退職し、自分の中の思いにしっかりと向き合っただけで独立した青木さん。最後に改めて現在の思いを伺った。

「人生が2回あれば別ですが、1回しかなく、もしかすると明日死んでしまうかもしれない。だからこそ、私は自分のやりたい中小企業支援に邁進したいと思います」

独立後の不安を1つずつ考えていくと、おそらく独立への一歩を踏み出せなくなるのではないだろうか。自分が診断士資格を取得したときにやりたかったことを思い返し、その気持ちに正面から向き合うことが、次に進む原動力になるのではと思う。夢に向かって、青木さんはこれからも自分のやりたいことに真っすぐに歩み続けていくに違いない。

青木 一生

(あおき かずお)

2016年中小企業診断士登録。アライフコンサルティング代表、中小企業基盤整備機構 新市場開拓コーディネーター、埼玉県よろず支援拠点サブコーディネーター、株式会社コムラッドファームジャパンシニアコンサルタント。行政施策活用や現場改善に強みを持ち、幅広く中小企業支援に携わる。



島津 浩平

(しまづ こうへい)

2016年中小企業診断士登録。金融機関勤務。マーケティング支援や補助金申請支援に従事しつつ、さまざまな媒体で中小企業診断士として執筆活動を行っている。

